

# 地域の養育力 向上めざす

## 甲府の社会福祉法人が包括施設

児童養護施設などを運営する社会福祉法人山梨立正光生園(甲府市伊勢2丁目、加賀美尤祥理事長)は、家庭における子どもの健全な養育を後押しするための包括施設「地域総合子ども家庭支援センター・テラ」を設立した。子どもの虐待や貧困が深刻化する中、次の世代への連鎖を防ぎ安心して暮らせる家庭環境を整えるのが目的。自宅に出向き養育や家事を援助する在宅支援事業を核に、里親の募集や自治体と連携したソーシャルワーク専門職の研修などを通して、地域社会の養育力向上を目指す。

〈小林恭子〉



国道358号沿いに建設された「地域総合子ども家庭支援センター・テラ」  
—いずれも甲府市伊勢3丁目

センターは、同市伊勢2丁目の国道358号(新々平和通り)沿いに建設。4月から稼働している。在宅支援は、社会福祉士や精神保健福祉士などの資格を持つ職員が、児童養護施設から子どもが自宅に戻った家庭などを定期的に訪問。親との信頼関係を築きながら子に対する関わり方をアドバイスしているほか、部屋の片付けや料理を手伝うなどして親を支え、家庭の養育力を補っている。

北村輝子統括責任者は「部屋が

センターに通う親子は、遊びを  
主なコミュニケーション手段とする心理療法を子どもが受けたり、親が相談員から助言を受けたりしている。センターでは自治体と連携し乳幼児のショートステイや、育児に困難を抱える可能性がある特定妊婦の支援も行う。

このほか、里親の募集や研修、子どもとのマッチング、その後のサポートなど一貫して行う機能を設置。来春以降、敷地内に建設中の建物で、児童福祉施設や自治体の職員らを対象に、虐待対応や里親養成に精通したソーシャルワークの専門職を養成するための研修機能も担う。



「養育不全はどこの家庭にも起こり得る。寄り添いながら子どもの適切な愛着形成に寄り添いたい」と話す山梨立正光生園の加賀美尤祥理事長

「子どもは社会の未来であり、社会が育てるものという価値意識を醸成する必要がある」とも訴える。「家庭の問題だとして置き去りにされてきた養育を社会の問題として捉え直し、援助を実践していく必要がある。家庭と伴走しながら養育を支援していきたい」と語る。

山梨立正光生園の加賀美尤祥理事長は、家庭内の養育機能の低下について「戦後の近代化の中で都市部に知らない人同士が集まり、人と人とのつながりが希薄になっていったことが背景にある」と指摘。「核家族が進んで家族構造も変化し『子どもは親が育てるもの』『子育ては家庭の責任』という概念が強くなっていった」と話す。

孤立した家庭で子どもが犠牲になる事件は少なくない。「子どもを育てることを正しく理解し学ぶことができないと、結果として虐待につながる」とし、「負の養育

2016年に児童福祉法が改正。問題のある家庭の子どもを施設で育てる旧来の「保護」施策から、親子を分離せず家庭での「養育」が原則となり、実親による養育を支援する仕組みが盛り込まれた。「適切な人間関係は家庭における親子関係の中で築かれる。適切な体験は子どもにとって重要」と語る。

「子どもは社会の未来であり、社会が育てるものという価値意識を醸成する必要がある」とも訴える。「家庭の問題だとして置き去りにされてきた養育を社会の問題として捉え直し、援助を実践していく必要がある。家庭と伴走しながら養育を支援していきたい」と語る。

### 社会が育てる意識 醸成を 加賀美理事長

2017年に厚生労働省の有識者会議がまとめた「新しい社会的養育ビジョン」では、各市区町村に養育相談や支援で中心的な役割を果たす子ども家庭総合支援拠点の整備を求めている。センターは、養育不全の環境におかれた子どものケアに長年当たってきた経験を生かし、支援の実践モデルとなることを目指している。

北村統括責任者は「公認心理師など養育の専門職員が子育てに関する心配ごとや家庭の悩みといった相談にも応じている。気になることや不安に思う点があれば気軽に相談してもらい、早い段階から親子を支える仕組みを作っていきたい」としている。

法人は、インターネットで資金を募るクラウドファンディングのサイト「READYFOR」で、10日まで寄付を受け付けている。

問い合わせは、クラウドファンディングが電話055(2335)1793、里親説明会が電話055(2222)8012。

センター建設費、運営費に充てる計画で、返礼品には法人運営の児童養護施設に暮らす少年が育てたマリーゴールドの種をはじめ、児童福祉に関するオンライン講習会やシンポジウムへの招待などを用意している。

23、26日と10月2日には、県立図書館で里親説明会を開く予定。里親になるための手順や子どもを育てる期間、費用などについて話す。

(3) 総合 2版

(第三種郵便物認可)

# 時標

私は現在、地域の子ども家庭支援のために設立された、地域総合子ども家庭支援センター・テラ(甲府市)に所属する「子ども心のクリニック・テラ」で子どもと家族の問題に特化した診療を行っています。このセンターは、クリニック、子ども家庭支援センター

ター・テラ、フォスタリング(里親養育包括支援機関・テラ)、子ども家庭福祉ソーシャルワーク専門職養成研修事業の4事業からなり、医療だけが独立したのではなく、全てが一体となって包括的に子どもと家庭を支えています。もともと小児科医で、子ども心の問題に興味を持ち、

当時日本ではあまり盛んではなかった小児精神医学の勉強のために、1980年代半ばにアメリカに留学しました。そこで、多くの虐待を受けた子どもとその家族に出会い、子どもと家族のつながりについて学びました。そのような子どもや家族と接するうちに、アメリカに来る前の臨床を思い浮かべ、日本でも決して少なくない問題だろうと考えるに至りました。

日本に帰国して小児精神医学の診療を開始しましたが、子どもと深く関わるほど、子どもは環境によって大きく変わることに、環境と子どもの関係に存在する悪循環を変える必要性を痛感しました。とはいえ、医療という枠組みだけでは地域との連携は簡単ではありません。数年前まで勤めていた国立成育医療研究センターでも、診療している子どもと家族が、住んでいる地域の方

## 地域の子育て力 向上させたい



奥山真紀子

子どもの心のクリニック・テラ院長

々と連携できるよう努めてきました。限界がありました。今回、機会を得て、地域子ども家庭支援ができる臨床を行えるようになりました。地域で暮らす親子を支えるのは医師一人ではできません。一緒に仕事をする子ども家庭支援センター・テラの心理士や

ソシャルワーカーらスタッフが丁寧に関わったり、家庭訪問をしたり、保育園や学校に出向くことなどを通して、さまざまな角度から包括的支援を行う必要があります。一方、親御さんが育てられない時に、温かい家庭で子どもたちが過ごせるよう、フォスタリング機関・テラでは里

親さんの募集、研修、支援などを行っています。支援の中で医療が役に立つ時は、クリニックで里親さんや里親さんへの診療も行っています。

お子さんの行動が問題になる時、「素行障害」「発達障害」などと診断名を付けることで改善するわけではありません。その子の一つ一つの行動には何らかの意味があるので、その意味を読み解きながら、理解して関わることで、子どもは変化していきます。親御さんにも、保育園や学校の保育士や先生方にも理解してもらうことが必要です。

叩いてしまつことなどもよくあります。親子の行動を理解することを目指して診療していると、辛い乳幼児期を過ごしたお子さん、辛い子ども期を送られた親御さん、予想と違う養育に苦悶している里親さんに対して、本当によく頑張っている

と頭が下がる気持ちになります。その気持ちを率直に伝えることで、互いの共感が高まります。気持ちが通じると自身の心も温かくなります。そのような営みを繰り返すことで、子どもと家族を包み込めるような地域支援の一端を担い、地域全体が子どもや家族に優しくなることを期待します。なぜなら、今後の子育ては親だけが抱えるのではなく、地域での子育てが主流になると考えられているからです。皆の力で、地域の子育て力を上げていきましょう。

おくやま・まきこさん

1954年東京生まれ。東京慈恵会医科大学卒、博士号取得。米タフツ大留学などを経て、2003年国立成育医療研究センターこころの診療部長、19年退職。専門は小児精神保健、子どものトラウマ診療、子ども虐待防止など。日本子ども虐待防止学会理事長、厚生労働省社会保障審議会児童部会委員。